



CITY WATCHING

クローズアップ CLOSE UP

新春に力走光る上州路

元旦恒例のニューイヤー駅伝が、1月1日に本市を発着点に開催。地区予選を勝ち抜いた37チームが出場し、7区100kmを駆け抜けました。沿道からの熱い応援を受け、旭化成が連覇を達成。襷をつなぐ選手たちの力走が新年の上州路を盛り上げました。



群馬らしさが笑い誘う

臨江閣で12月14日に「d47落語会」を開催。これは落語家・柳家花緑さん、脚本家・藤井青銅さんが、各都道府県に1つずつ、ご当地ネタの新作落語を作り披露するもの。群馬落語では、空っ風や上毛かるたを取り入れ、観客も納得の笑いに包まれました。



阿久沢家で冬キャンプ

12月16日・17日に開催した「古民家CAMP in 阿久沢家」。世代を超えたつながりを生み出し、赤城南麓の魅力を発掘しようと、前橋の地域若者会議と宮城地区住民が連携。バーベキューやいろり会議など、国重要文化財・阿久沢家住宅の活用法を模索しました。

心の眼で物事の真実を見抜く

いきいき
まえばし人
懸賞論文で第二席
障害者空手国内大会3連覇
小暮愛子さん・39歳
日吉町



小学生2人の子育てに奮闘している小暮さん。10歳の時に視野が徐々に狭まる網膜色素変性症と診断され、27歳の時には両目を失明した。「高校を卒業後、留学先のアメリカで症状が悪化して、左目を失明しました」。帰国後、家にこもりがちになり、孤独感に悩まされた。「留学を諦めたことのショックや、右目も失明してしまうという恐怖もありました」。しかし、点字の講座などに参加するようになってから、状況は好転したという。「私と似た境遇の人もいて、理解し合える仲間のおかげで、気持ちになりました」

壁を乗り越え、物事を前向きに捉えられるようになった。高校時代に熱中した空手を再開し、障害者空手の国内大会で3連覇。世界大会を目指し、子どもと通う道場で汗を流す。また、今までの体験を基に執筆し応募した、北野生涯教育振興会の懸賞論文「心眼」が第二席に選ばれた。「目で見ることは小さなことだと書きました。物事の本質は心の眼で見抜くもの。これからも鍛えたいですね。障害のあるなしに関わらず、お互いを理解し合うことを楽しめたら」と笑顔を見せる。その社会の実現には、心の眼が欠かせない。

萩原朔美 河畔奇譚



vol.5

圓前橋文学館
☎027-235-8011



朔太郎作品で詩に目覚めた、と松浦会長

●朔太郎の詩を読み解く
萩原（以下H）朔太郎の詩には「光」がたくさん出てくる。これは前橋が明治に電化されたことが反映されているかもしれない。そんなことを考えると面白いかもですね。
松浦（以下M）僕は中学生の

時に「殺人事件」を読んで衝撃を受けました。日本近代詩は、自由律で言葉の音楽を奏でる。朔太郎はそれを確立した。その意味で自分の作品も影響を受けていると思います。
●朔太郎の詩と前橋の風土
H これだけ風が吹くと心に影響を受けると思うんだよね。M 今日も前橋駅に降りて、風が吹いていて。寒いけど爽快だなとも思いました。身も心もピツとなる。これは精神に影響を与えるでしょうね。朔太郎もセンチメンタルとか言われているけれど、金沢出身の室生犀星の表現に比べれば湿っていないと思う。冷たい風を浴びて詩の魂が大きくなったという気がしますね。朔太郎は郷土への複雑な思いを文学として表現した人。前橋の皆さんは深い度量で見守ってくれば、と思います。
（3月15日号へ続く）



言葉の使い方も今と違うかも、と萩原館長